

2022年12月期 第2四半期決算短信〔IFRS〕（連結）



2022年8月9日

上場会社名 ペプチドリーム株式会社 上場取引所 東  
 コード番号 4587 URL <https://www.peptidream.com/>  
 代表者（役職名） 代表取締役社長CEO（氏名） リード・パトリック  
 問合せ先責任者（役職名） IR広報部ディレクター（氏名） 沖本 優子（TEL）044-223-6612  
 四半期報告書提出予定日 2022年8月10日 配当支払開始予定日 —  
 四半期決算補足説明資料作成の有無 : 無  
 四半期決算説明会開催の有無 : 有（ 機関投資家向け ）  
 （百万円未満切捨て）

1. 2022年12月期第2四半期の連結業績（2022年1月1日～2022年6月30日）

（1）連結経営成績（累計）（%表示は、対前年同四半期増減率）

	売上収益		Core営業利益		営業利益		税引前利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2022年12月期第2四半期	5,024	72.2	△1,180	—	△1,559	—	△1,484	—
2021年12月期第2四半期	2,916	—	436	—	436	—	312	—
	親会社の所有者に 帰属する四半期利益		四半期包括利益 合計額					
	百万円	%	百万円	%				
2022年12月期第2四半期	△1,056	—	△622	—				
2021年12月期第2四半期	△8	—	875	—				
	基本的1株当たり 四半期利益		希薄化後1株当たり 四半期利益					
	円 銭		円 銭					
2022年12月期第2四半期	△8.13		△8.13					
2021年12月期第2四半期	△0.07		△0.07					

（2）連結財政状態

	資産合計	資本合計	親会社の所有者に 帰属する持分	親会社所有者 帰属持分比率
	百万円	百万円	百万円	%
2022年12月期第2四半期	51,895	24,739	24,739	47.7
2021年12月期	27,034	25,350	25,350	93.8

2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭				
2021年12月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2022年12月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2022年12月期(予想)	—	—	—	0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

### 3. 2022年12月期の連結業績予想（2022年1月1日～2022年12月31日）

（％表示は、対前期増減率）

	売上収益		Core営業利益		営業利益		税引前利益		親会社の所有者に 帰属する当期利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
通期	24,500	160.0	6,600	61.2	—	—	—	—	—	—

（注）直近に公表されている業績予想からの修正の有無：有

当社連結業績予想の売上収益及びCore営業利益以外の項目については、2022年3月28日付でPDRファーマ株式会社を取得したことに伴う取得原価の配分等、業績に与える影響を精査中であり、確定次第開示いたします。

2022年12月期の連結業績予想より、経常的な収益性を示す指標として営業利益から非経常的な収益及び費用を除外したCore営業利益を開示いたします。Core営業利益は営業利益から企業買収に係る会計処理の影響及び買収関連費用、有形固定資産、無形資産及びのれんに係る減損損失、損害賠償や和解等に伴う損益、非経常的かつ多額の損益、個別製品又は開発品導入による無形資産の償却費を控除して算出しております。

#### ※ 注記事項

（1）当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動：有

（連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動）

新規 1社（社名）PDRファーマ株式会社、除外 -社（社名）-

（2）会計方針の変更・会計上の見積りの変更

① IFRSにより要求される会計方針の変更：無

② ①以外の会計方針の変更：無

③ 会計上の見積りの変更：無

（3）発行済株式数（普通株式）

① 期末発行済株式数（自己株式を含む）

2022年12月期2Q	130,010,400株	2021年12月期	130,010,400株
2022年12月期2Q	179,405株	2021年12月期	182,964株
2022年12月期2Q	129,828,143株	2021年12月期2Q	127,966,687株

② 期末自己株式数

③ 期中平均株式数（四半期累計）

（注）期末自己株式数には、株式会社日本カストディ銀行（信託E口）が保有する当社株式（2021年12月期182,800株、2022年12月期2Q 179,200株）が含まれております。また、株式会社日本カストディ銀行（信託E口）が保有する当社株式を、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております（2021年12月期2Q 190,017株、2022年12月期2Q 182,064株）。

※ 四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

（将来に関する記述についてのご注意）

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

（国際会計基準（IFRS）の適用）

当社グループは、2022年12月期第1四半期連結累計期間より国際会計基準（以下「IFRS」という。）を適用しております。また、前第2四半期連結累計期間及び前連結会計年度の財務数値についても、IFRSに準拠して表示しております。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	12
(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明	13
2. 要約四半期連結財務諸表及び主な注記	15
(1) 要約四半期連結財政状態計算書	15
(2) 要約四半期連結損益計算書及び要約四半期連結包括利益計算書	17
(3) 要約四半期連結持分変動計算書	19
(4) 要約四半期連結キャッシュ・フロー計算書	20
(5) 要約四半期連結財務諸表に関する注記事項	21
(継続企業の前提に関する注記)	21
(株主資本の変動に著しい変動があった場合の注記)	21
(セグメント情報等)	21
(初度適用)	23

## 1. 当四半期決算に関する定性的情報

### (1) 経営成績に関する説明

当第2四半期連結累計期間（2022年1月1日から2022年6月30日）において、当社独自の創薬開発プラットフォームシステムであるPDPS（Peptide Discovery Platform System）を活用した創薬開発事業、及び当社の100%子会社であるPDRファーマ株式会社による放射性医薬品事業を実施しております。

#### 1. 創薬開発事業

当社では、創薬開発事業において①創薬共同研究開発、②PDPSの技術ライセンス、③戦略的提携による自社パイプラインの拡充という3つの事業戦略を進めており、2022年6月30日現在、124のプログラムが進行しております。

下表では、各創薬アプローチごとのプログラム数を記載しております。

【創薬アプローチごとのプログラム数】	2022年6月末時点
特殊ペプチド医薬品	73
低分子医薬品	
ペプチド-薬物複合体（PDC医薬品）	51
多機能ペプチド複合体（MPC医薬品）	
計	124

下表では、各研究開発ステージにおけるプログラム数を2022年3月末時点のものと比較しております。

【研究開発ステージごとのプログラム数】	2022年3月末時点	2022年6月末時点
ターゲット検証 - ヒット化合物	31	29
ヒット化合物 - リード化合物（Hit-to-Lead）	60	62
リード化合物 - GLP安全性試験（Lead-to-GLP-Tox）	21	21
GLP安全性試験 - IND申請（GLP-Tox-to-IND）	8	8
臨床試験 第1相（フェーズ1）	4	4
臨床試験 第2相（フェーズ2）	0	0
臨床試験 第3相（フェーズ3）	0	0
計	124	124

（注）上記のプログラム数は、PDPSの非独占的技術ライセンス先でのプログラム及び放射性医薬品事業のプログラムを含んでおりません。

下表では、主要なプログラムの開発状況を記載しております。

プログラム	適応症	パートナー	非臨床			臨床			開発状況
			GLP安全性試験 - IND申請	第1相	第2相	第3相			
PD-L1 ペプチド治療薬	がん	Bristol-Myers Squibb BMS-986189						第1相臨床試験完了 (NCT02739373) (2016年12月)	
PD-L1 ペプチド治療薬	がん	Bristol-Myers Squibb						第1相臨床試験実施中 (ISRCTN17572332) (2022年4月から)	
PD-L1 PDC診断薬	がん	Bristol-Myers Squibb BMS-986229						第1相臨床試験実施中 (NCT04161781) (2019年11月から)	
CD38 MPC治療薬	多発性骨髄腫	Biohaven BHV-1100 + NK細胞						第1a/1b相臨床試験実施中 (NCT04634435) (2021年10月から)	
S2-protein ペプチド治療薬	新型コロナウイルス 感染症	ペプチエイド PA-001						臨床研究実施中 (JRCTs031210601) (2022年2月から)	
HA-protein ペプチド治療薬	インフルエンザ	自社 PD-001						パートナーリング検討中/臨床試験計画中	
GhR ペプチド治療薬	先端巨大症/ 神経内分泌腫瘍	Amolyt AZP-3813						2022年中に臨床入り目標	
Myostatin ペプチド治療品	デュシェンヌ型筋ジストロフィー/ 筋肉量低下	川崎医科大学						2023年中に臨床入り目標/パートナーリング検討中	
非開示 ペプチド治療薬	非開示	非開示						2023年中に臨床入り目標	
CD38 MPC治療品	多発性骨髄腫	Biohaven BHV-1100						GLP安全性試験 - IND申請ステージ	
非開示 ペプチド治療薬	非開示	非開示						GLP安全性試験 - IND申請ステージ	
非開示 PDC診断薬	がん	非開示						GLP安全性試験 - IND申請ステージ	
非開示 PDC診断薬	がん	非開示						GLP安全性試験 - IND申請ステージ	

1つ目の事業戦略であるPDPSを活用した国内外の製薬企業との創薬共同研究開発については、第2四半期において、2022年4月に、Bristol-Myers Squibb社との創薬共同研究開発で見出された医薬品候補化合物について新たな第1相臨床試験が開始されました (ISRCTN17572332, 登録番号:QSC203717)。当社はこれまでBristol-Myers Squibb社との創薬共同研究開発においてPD-L1阻害ペプチドを同定し、Bristol-Myers Squibb社は当該ペプチド (BMS-986189)の第1相臨床試験を2016年12月に完了しておりました。新たな第1相臨床試験では、当該ペプチドから派生した薬剤の健常人ボランティアに対する安全性と忍容性の検証を目的としています。

また、2022年5月23日に、Genentech社とc-METアゴニストプログラムに関する創薬共同研究開発契約を締結いたしました。本プログラムは、当社の関連会社であるペプチグロース株式会社との間で進めてきた、細胞治療・再生医療領域における細胞培養の培地成分として使用される成長因子を代替するペプチドの共同開発から見出されたもので、当社はこの代替ペプチドの医薬品用途での開発・販売権を有しています。今回の提携により、Genentech社から契約一時金を受領し、また今後、開発の進捗状況に応じたマイルストーンフィーや製品化後の売上金額に応じたロイヤルティーを受け取る可能性があります。

第2四半期においても、創薬共同研究開発を進めている複数のパートナー企業から研究開発支援金を継続的に受領しております。今後、現在進行しているプログラムについて、プログラムの進行に応じた開発マイルストーンフィー、販売マイルストーンフィー及び販売製品の売上高に応じたロイヤルティーの受領の可能性があります。今後、新たなマイルストーンフィーを受領した際には、パートナー企業の許諾を得た上で進捗の報告をできるものと考えております。また、当社は創薬共同研究開発に関心のある複数の企業との間で新たな契約締結に向けた交渉を継続的に進めております。

2つ目の事業戦略であるPDPSの技術ライセンスについては、2022年6月30日現在、10社 ; Bristol-Myers Squibb社 (2013年)、Novartis社 (2015年)、Ely Lilly社 (2016年)、Genentech社 (2016年)、塩野義製薬株式会社 (2017年)、Merck社 (2018年)、ミラバイオロジクス株式会社 (2018年)、大鵬薬品工業株式会社 (2020年)、Janssen社 (2020年)、小野薬品工業株式会社 (2021年)との間で非独占的技術ライセンス契約を締結しております。同事業においては、各ライセンス先企業から技術ライセンス料とともに開発プログラムの進捗ごとのマイルストーンフィーが当社に支払われます。なお、マイルストーンを達成するまでの間は、ライセンス先企業での研究内容や進捗について当社に知らされることはありません。また、当社はPDPSの技術ライセンス契約に関心をもつ複数の企業との交渉を継続的に進めております。

3つ目の事業戦略は、世界中の高い技術力を有する創薬企業・バイオベンチャー企業及びアカデミア等の研究機関と戦略的提携を組むことで、自社の医薬品候補化合物（パイプライン）の推進・拡充を図ることが狙いです。同事業においては、これらのプログラムを少なくともリード化合物/臨床候補化合物の選定完了まで、場合によっては第1相臨床試験あるいは第2相臨床試験完了まで自社開発又は戦略的パートナーとの共同開発を進めることにより、通常の開発候補品よりも収益性の高い条件で大手製薬企業にライセンスアウト（導出）することを目標としております。当社では、PDPS技術を用いて同定したヒット化合物を起点に、①特殊ペプチド医薬品、②低分子医薬品、③ペプチド-薬物複合体（PDC医薬品）、④多機能ペプチド複合体（MPC医薬品）の4つのカテゴリーの医薬品開発を進めていくために必要な能力の拡充を進めております。同事業では、戦略的パートナーの独自の技術・ノウハウと当社の技術を組み合わせることでより高い価値のプログラムが生み出されることに加え、開発費用を両社で負担することにより、開発に成功した場合には、従来の創薬共同研究開発プログラムと比べてより高い比率で当社に収益が分配されます。また、自社創薬についても、複数の創薬プログラムが進行しており、今後、臨床開発に向けた新たな進捗の報告ができるものと考えております。

当社は10社（JCRファーマ株式会社、モジュラス株式会社、Sosei Heptares、Biohaven Pharmaceuticals社、ポーラ化成工業株式会社、JSR株式会社、三菱商事株式会社（ペプチグロース株式会社）、RayzeBio社、ペプチエイド株式会社、Amolyt Pharma社との戦略的提携を実施しております。また、川崎医科大学とは難治性希少疾患に対するペプチド創薬に関する共同研究を実施し、ビル&メリンダ・ゲイツ財団からは結核に対する新規治療薬開発に関する研究支援金を受領しております。なお、日本メジフィジックス株式会社とは、2022年7月6日に発表した通り、従来の戦略的共同研究開発および商業化に関する取り組みを終了し、これまでの研究活動における共有成果に関する権利は、全て当社に譲渡することを合意いたしました。今後は、当社の自社プログラムとして開発を継続いたします。

JCRファーマ株式会社（以下 JCRファーマ）とは、2016年2月に開始した共同研究において、血液脳関門（BBB）を通過し脳組織及び筋肉組織へ医薬品候補化合物を届けることを可能とするトランスフェリン受容体（TfR）結合ペプチド（キャリアペプチド）の創製に成功しています。多くの薬物はBBBを容易に通過することができず、脳内への取り込み効率の低さが中枢神経疾患の医薬品開発において大きな課題となっております。今回創製したキャリアペプチドは、抗体を中心とするタンパク質、ペプチド、核酸、低分子化合物等、様々な種類の治療薬と結合し、PDCとすることで脳内への取り込み効率を向上させる効果を有しております。また、本キャリアペプチドは共通するメカニズムを介して筋組織への効率的な治療薬の輸送も実現いたします。神経筋疾患の医薬品開発においては、全身に存在する筋肉内標的組織に治療薬を届けることが大きな課題となっており、本キャリアペプチドはこうした課題を解決する手段としても応用可能です。JCRファーマと当社は第三者へのライセンス活動に注力しており、契約締結からキャリアペプチドの供給まで当社が主導しております。2020年12月22日には、両社から最初の導出となる、武田薬品工業株式会社（以下 武田薬品）との間での神経筋疾患領域における包括的な共同研究及び独占的ライセンス契約の締結を発表いたしました。2021年7月27日には、武田薬品との共同研究及び独占的ライセンスの枠組みを中枢神経系（CNS）疾患にも拡大させました。両社は、キャリアペプチドと武田薬品が選択した医薬品候補化合物を組み合わせ、神経筋疾患領域、CNS領域で多くの医薬品を生み出していきたいと考えております。また、当社は、様々な企業とのさらなる共同研究やライセンス契約について引き続き協議しております。本キャリアペプチドのライセンス活動によって得られる収益は、当社とJCRファーマとの間で分配されます。

モジュラス株式会社（以下 モジュラス）とは、これまで開発が難しかった創薬ターゲットに対し、PDPSを用いて同定したヒットペプチド化合物を基に低分子医薬品候補化合物の開発を進めております。モジュラスは最先端の計算科学を駆使した高速かつ効率的な低分子医薬品候補化合物のデザインに関する技術を有する創薬企業です。両社は開発コストを分担し、得られた成果も両社で共有いたします。当社は複数のキナーゼに対して、変異の影響を受けにくいATP-非競合型インヒビター（アロステリックインヒビター）の候補となるヒットペプチドをすでに同定しております。ヒットペプチドと標的キナーゼとの複合体の結晶構造もすでに複数得られており、計算科学を用いて低分子医薬品候補化合物をデザインする取組みを進めております。この手法を用いて、両社はアレルギー疾患に関与するとされているチロシンキナーゼの一種であるKITに対して高い選択的結合能を有する低分子リード化合物を同定し、リード化合物の有効性を検証するためのin vivo POC試験を完了いたしました。両社は、引き続き非臨床試験を共同で実施し、2022年中に開発候補化合物の選定を完了することを目指すとともに、様々なパートナーングや導出の可能性を積極的に協議しております。モジュラスへの当社の出資比率は5%未満となっております。

Sosei Heptaresとは、疼痛、がん、炎症性疾患等への関与が既に検証されているGタンパク質共役受容体（GPCR）



として知られるプロテアーゼ活性化受容体2 (PAR2) をターゲットとして新規治療薬の研究開発・商業化を目的とした戦略的共同研究を行っております。この共同研究では、両社のもつ業界屈指のプラットフォーム技術を融合いたします。両社で選択したGPCRターゲットに対して、Sosei HeptaresのStaRプラットフォームを用いて安定化し、当社のPDPSを用いてヒット化合物を得ることで、新たな治療薬の開発を進めてまいります。本契約のもと両社はコストを分担し、得られたすべての成果を共有いたします。2021年5月12日に発表いたしました通り、両社は既にPAR2に対して高い親和性と選択性を有するペプチド・アンタゴニストを同定しておりましたが、その後の最適化により経口投与でも消化器内での安定性が見込まれるリード候補化合物の特定に成功いたしました。これらの候補化合物に基づき、炎症性腸疾患 (IBD) をはじめとする消化器領域における炎症性・疼痛性の疾患に対する新たな経口ペプチド医薬品としての開発を目指します。両社は、2022年中に前臨床試験の開始を目指すとともに、様々なパートナーリングや導出の可能性を積極的に協議しております。

Biohaven Pharmaceuticals社 (以下Biohaven社) とは、複数の適応症でがん免疫治療薬の共同研究開発を行っております。当社から2021年1月4日に発表いたしました通り、Biohaven社が当社の戦略的共同研究開発先であったKleo Pharmaceuticals社 (以下Kleo社) と合併契約を締結したことで、当社がKleo社と進めていた、Kleo社が有するAntibody Recruiting Molecules (ARMs™) やSynthetic Antibody Mimics (SyAMs) 等の新たながん免疫療法のプラットフォーム技術を用いたPDC医薬品候補化合物の創製に関するすべての研究開発プログラムはBiohaven社によって承継されました。Biohaven社とは2つの臨床候補化合物 (「BHV-1100 (KP1237, CD38-ARM) + 自家NK細胞」と「BHV-1100 (CD38-ARM) 」) の開発を進めており、いずれも骨髄腫細胞表面に発現しているCD38をターゲットとし、PDPSを用いて特定された特殊環状ペプチドにARMs™を結合したPDC医薬品候補化合物 (CD38-ARMs) で、多発性骨髄腫を適応症としております。ARMsは、体内に内在する抗体と結合し、その抗体が腫瘍細胞への高い殺傷能力を有する免疫細胞を誘導することで骨髄腫細胞を攻撃する作用メカニズムをその特徴としております。CD38は多発性骨髄腫のターゲットとして実証されていることに加えて、慢性リンパ性白血病やその他のがん細胞表面にも多く発現していることが知られております。「BHV-1100 (ARM) + 自家NK細胞」は短期間作用型の治療薬として、「BHV-1100 (ARM) 」は長期間作用型としてダラツム Mab治療後の再発/難治性症例を含むより広い多発性骨髄腫患者向けに使用される治療薬として開発を進めております。「BHV-1100 (ARM) + 自家NK細胞」は2020年9月8日に米国FDAよりオーファンドラッグ (希少疾患用医薬品) 指定を受けております。「BHV-1100 (ARM) 」は、抗CD38抗体であるJanssen社のダラツム Mabと同等か又はそれ以上の活性を示す一方、CD38を発現している免疫エフェクター細胞を減少させないという動物実験の結果が得られており、多発性骨髄腫のファーストライン治療薬として使用されているダラツム Mabに対して大きな利点を有すると考えています。2021年10月27日に、「BHV-1100 (ARM) 」と自己サイトカイン誘導記憶用 (CIML) NK細胞を投与する第1a/1b相臨床試験 (ClinicalTrials.gov Identifier:NCT04634435) を開始いたしました。この臨床試験では、造血幹細胞移植前に測定可能残存病変 (MRD) が陽性である多発性骨髄腫の被検者において、安全性、忍容性、探索的有効性に関する評価を実施しております。

ポーラ化成工業株式会社 (以下 ポーラ化成工業) とは、ペプチドを用いた化粧品、医薬部外品、及び医薬品の研究開発を行っております。当社のPDPS技術を活用することで、ポーラ化成工業における医薬部外品や化粧品の素材開発に拡大するとともに、ポーラ化成工業との協業により、皮膚に効果のある医薬品シーズの創出等に取り組んでまいります。両社は、in vitro及びex vivoモデルにおいて有効性が確認されている、複数の有望なリード化合物について取得を完了しております。

川崎医科大学とは、難治性希少疾患であるデュシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) を含む様々な筋ジストロフィーに対する革新的マイオスタチン阻害剤の共同研究開発を行っております。DMDは、進行性の筋力低下を特徴とする遺伝性疾患である筋ジストロフィーの内、最も多くみられる型の疾患です。ジストロフィン遺伝子変異により、筋肉細胞の維持に重要なジストロフィンが欠損又は異常をきたし、主に幼少期から成長とともに急速な筋力低下、特に骨格筋や横隔膜の筋線維の変性・壊死と不完全再生から線維化・脂肪化が生じ、歩行困難等の運動障害が生じるとともに進行に伴い心筋や呼吸筋に影響がおよび、急性呼吸不全を引き起こします。このような患者さんのQOLが著しく低下する致死性の難治性希少疾患です。これまで複数の作用機序に対する抗体薬や核酸薬 (遺伝子治療薬、エキソスキッピング薬、ストップコドンリードスルー薬、遺伝子修復薬等) の研究開発が行われてきましたが、幅広い患者さんに提供可能でかつ高い有効性をもつ治療薬が存在せず、第一選択薬となる新たな治療薬の開発が期待されています。GDF8 (growth differentiation factor8、増殖分化因子8) とも言われているマイオスタチンは、筋細胞で産生・放出されるタンパク質で、筋細胞に働きかけ筋細胞の増殖を抑制します。健常時において横紋筋 (横隔膜や四肢筋を含む) の肥大を抑制する因子 (サイトカイン) として血液中及び筋組織内に多く分布しており、近

年の研究ではマイオスタチン欠損、あるいはマイオスタチン阻害剤を投与した動物において有意に筋肉量・筋力の増強が見られたという結果が得られています。このようにマイオスタチンはDMDおよび他の筋肉量の低下をもたらす疾患において筋肉の分解を抑制し、筋肉増強や筋力の改善をもたらすターゲットとして期待されます。当社は、現在の開発化合物はジストロフィン遺伝子変異部位に限定されない、幅広いDMD患者を対象にすることができ、その結果患者さんの生活の質を著しく向上させることができるのではないかと考えております。これまでマイオスタチン阻害剤の研究開発は抗体医薬品によるアプローチが多く、これらは動物実験では有望な結果を示していますが、様々な理由から未だにヒトでの有効性を示せていないという状況です。一方、マイオスタチン阻害剤の開発においては、血液中での安定性のみならず、筋組織への高い移行性が重要な鍵となることから、当社では中分子であるペプチドならではの特徴を活かした化合物の最適化を重ねてまいりました。今後、ペプチスター株式会社において原薬製造を進めるとともに、必要とされる長期の安全性試験を含む非臨床試験を完了し、2023年の臨床入りを予定しています。DMDは難病指定されている希少疾患であることから、優先審査等各種制度の活用による開発期間の短縮化を図ってまいります。また、複数のパートナー候補先との間で共同開発及び導出に向けた協議を進めております。

ビル&メリンダ・ゲイツ財団（以下 ゲイツ財団）とは、世界の最貧国において大きな問題となっている2つの感染症である結核、及びマラリアを治療するための新規特殊環状ペプチドを見出すことを目的としたプログラムにつき、ゲイツ財団からの研究支援金を受けて研究開発を進めております。2019年11月1日に、当社はゲイツ財団から結核に対する新規治療薬開発に関して第2回目の研究支援金を受領することを発表いたしました。2017年11月に受領した初回の研究支援金による取組みの結果、複数の有望なヒット候補化合物が特定されました。第2回目の研究支援金は、結核治療薬として最も有望なヒット化合物を、非臨床試験を視野に入れて最適化を行い、リード化合物として開発することに充当されます。現在開発を進めている結核治療薬のリード化合物では、経口剤として最適化することに注力しております。また、潜伏中の結核に対しても効果を有する可能性がある点は大きな優位性の1つと考えております。細菌感染は全世界の死因の中で上位に位置しており、結核は世界人口の約3分の1が潜伏感染しているといわれ毎年1,040万人の新規感染症例と180万人の死亡例が報告されております。今回の支援金により開発される治療薬は、ゲイツ財団との合意に基づき、低中所得国（LMIC）においては安価で提供されることになっております。一方、先進国においては、当社が自社での商業化及びライセンス活動の権利を有しております。

JSR株式会社（以下 JSR）とは、抗体医薬品等のバイオ医薬品の精製過程で用いられるアフィニティクロマトグラフィーに適用可能な特殊環状ペプチドの共同研究を開始しております。医療現場で広く使われている抗体医薬品等のバイオ医薬品の製造は大きく、1) CHO細胞等を培養し目的とするタンパク質を作る工程と、2) その産生細胞を除去し、多くの不純物から目的タンパク質を精製する工程に分類されます。この精製工程に用いられるクロマトグラフィーは、プロテインA等のタンパク質リガンドを用いたアフィニティクロマトグラフィーをはじめ、イオン交換クロマトグラフィー等、目的に応じて様々なクロマトグラフィーが使用されますが、特殊環状ペプチドを用いた新たなクロマトグラフィー担体の開発・商業化は、バイオ医薬品の精製プロセスの簡便化・低コスト化に貢献します。特殊環状ペプチドは化学合成が可能のため、従来のタンパク質リガンドと比べて均一な品質のリガンドをより安定的に大量製造できる利点があり、また物理的に小さい特殊環状ペプチドをリガンドとすることで精製効率そのものを向上させること、さらにこれまでアフィニティクロマトグラフィーでは精製が難しかったバイオ医薬品の精製も実現可能となります。

三菱商事株式会社（以下 三菱商事）とは、細胞治療・再生医療等製品の製造等に使用される、細胞培養向け培地の重要成分である、成長因子を代替するペプチド（以下 代替ペプチド）の開発・製造・販売を行う合弁会社・ペプチグロース株式会社（以下 ペプチグロース）を設立いたしました。ペプチグロースは、両社が持つノウハウを利活用し、医薬品産業における細胞治療・再生医療等の発展に向け、取り組んでまいります。成長因子は、ヒトを含む動物の体内に広く存在し、細胞の成長・増殖や、またiPS細胞・ES細胞等の幹細胞を神経細胞や血液細胞等へと分化誘導させる際に重要な役割を担うタンパク質です。現在は、動物血清からの抽出物、あるいは組み換え技術によって製造されたものが主に使用されていますが、不純物混入による安全性上のリスク、製造ロット間の品質のばらつき、高額な製造コスト等が、医薬品産業が直面する課題となっております。ペプチグロースは、当社のPDPSを用いて、成長因子と同等の機能を有する代替ペプチドを同定し、動物血清・組み換え技術を用いない、化学合成による新規製造手法を開発いたします。また、商業ベースでの製造工程・体制を確立することで、品質面においては高純度で製造ロット間のバラつきも無くし、またコスト面の合理化も実現してまいります。現時点で数十種類を超える成長因子が知られており、完全ゼノフリー培地の実現を可能とする為には複数の成長因子を化学合成品によって代替していく必要があります。複数品目の成長因子について化学合成品（代替ペプチド）を包括的に開発する今回の



取組みは、史上初であり、細胞治療・再生医療の普及拡大に必要な不可欠なものと考えております。ペプチグロースは三菱商事グループが有する幅広いネットワーク・顧客基盤を活用することで、グローバル市場における代替ペプチドの販売及び市場拡大を図り、医薬品産業が抱える課題解決や細胞治療・再生医療の普及促進に貢献してまいります。2021年に、HGF代替ペプチド(PG-001)とTGFβ1阻害ペプチド(PG-002)の販売を、2022年4月よりBDNF代替ペプチド(PG-003)の販売を、2022年7月よりBMP4,7阻害ペプチド(PG-004)の販売を開始いたしました。今後も順次新たな製品の開発・上市を計画しております。当社は、独占的にこれら代替ペプチドの医薬品としての開発・販売権を有し、複数のパートナー候補先と医薬品開発の協議を実施しております。これまでに、PG-001の医薬品としての開発に関しては、Genentech社と創薬共同研究開発契約を締結いたしました。ペプチグロースへの出資比率は、ペプチドリーム39.5%、三菱商事60.5%となっております。

RayzeBio社とは、2020年8月4日に、ペプチド-放射性核種複合体(以下 ペプチド放射性医薬品)の創製に関する戦略的共同研究開発契約を締結いたしました。本契約に基づき当社は、両社で選定した複数のターゲット分子に対し、PDPSを用いて、PDCとして使用する新たなペプチドの同定及び最適化を行います。RayzeBio社は、それらペプチドを用いたペプチド放射性医薬品に関する全世界での開発及び商業化の独占的な権利を有し、ペプチド放射性医薬品の開発を進めます。当社は非臨床段階までの研究開発を主導し、RayzeBio社はその後のトランスレーショナルリサーチ、臨床開発及び商業化を主導いたします。当社は契約一時金として2020年8月に、またマイルストーンフィーとして2020年11月、2021年6月にRayzeBio社の一部株式を受領いたしました。また、2022年8月9日には、共同開発プログラムを新たに追加することを目的とした戦略的提携期間の延長、および両社が共同開発するペプチド放射性医薬品プログラムについて当社が日本での開発・商業化を行うことができるオプション権をRayzeBio社から当社に付与することを合意いたしました。RayzeBio社への当社の出資比率は5%となっております。

ペプチエイド株式会社(以下 ペプチエイド)は、新型コロナウイルス感染症治療薬の開発を目的として、2020年11月12日に富士通株式会社(以下 富士通)、株式会社みずほフィナンシャルグループの連結子会社であるみずほキャピタル株式会社(以下 みずほキャピタル)、株式会社竹中工務店(以下 竹中工務店)、及びキシダ化学株式会社(以下 キシダ化学)との間で設立した合弁会社です。当社は、PDPSを用いて、コロナウイルスがヒト細胞に侵入する際に必須となるスパイクタンパク質における複数の領域を創薬ターゲットとした、新型コロナウイルス感染症治療薬の開発候補化合物の同定を多方面から行ってまいりました。新会社では、新型コロナウイルス感染症に対する治療薬の候補化合物について当社から譲渡を受け、非臨床試験からヒトでの有用性確認(Proof of Concept)に必要な前期の臨床試験までを最短で実施することを目指しております。ペプチエイドは、2021年3月23日に、新型コロナウイルス感染症治療薬の開発候補化合物の特定を完了し、開発候補品PA-001の非臨床試験を開始したことを発表いたしました。国立感染症研究所等と共同で化合物の評価を進めてまいりましたが、PA-001は従来型のSARS-CoV-2だけでなくアルファ株、ベータ株、ガンマ株、デルタ株、オミクロン株の各種変異株(生ウイルス)に対しても同様に高い抗ウイルス活性を有することを確認しております。また、現在緊急使用許可承認を得ている新型コロナウイルス感染症治療薬との併用において、in vitro試験での高い相乗効果を確認しております。各種一般毒性、安全性薬理、遺伝毒性試験等から構成されるPA-001の非臨床試験が予定通りのスケジュールで完了し、PA-001の高い安全性が確認されました。2022年2月より、臨床研究法に基づく早期探索的臨床研究(以下、「臨床研究」)を実施いたしました。臨床試験では、健康人に対するPA-001の用量漸増単回投与を静脈内注射により実施し、有害事象の有無・注射部位反応・バイタルサイン等の評価を行いました。その結果、PA-001の投与による有害事象等は確認されず、良好な安全性プロファイルが確認されました。また、PA-001の用量依存的な血中濃度プロファイルの相関を確認する結果が得られました。現在、ペプチエイドは臨床研究で取得された安全性データ等を活用し、米国での臨床試験開始に向けた準備を進めております。また、当社とペプチエイドは、PA-001に関心をもつ製薬企業との間でパートナーリングや導出の可能性を並行して協議しております。ペプチエイドは、2021年9月に約8億円の増資を行い、当社の出資比率は39.4%となっております。

Amolyt Pharma社(以下 Amolyt社)とは、2020年12月8日に、内分泌系の希少疾患であり重篤な合併症を伴う先端巨大症や神経内分泌腫瘍を適応症とする新たな治療薬の開発を目的とした、成長ホルモン受容体拮抗薬(GHRA)候補ペプチド化合物の最適化に関する戦略的共同研究開発及びライセンスオプション契約を締結いたしました。2021年9月9日に、Amolyt社がGHRA候補ペプチド化合物に関するライセンスオプションを行使し、当社は、Amolyt社に対して全世界を対象とする開発・商業化の権利をライセンスいたしました。当社は今後、GHRA候補ペプチド化合物に関し、Amolyt社から開発及び商業化の進捗に応じたマイルストーンフィー、及び製品化後は売上金額に応じたロイヤルティーを受領する可能性があります。最適化に成功した先端巨大症に対する治療薬候補化合物

(AZP-3813) は、既存薬であるソマトスタチンアナログによる治療で十分な効果が得られない患者さんに対して、同剤との併用を想定した開発が実施されます。AZP-3813は同様に成長ホルモン受容体拮抗薬であるPfizer社のペグビソマントと比較して血中IGF-1濃度のコントロールに優れているという動物実験の結果が得られており、Amolyt社より2022年5月の欧州内分泌学会（ECE）と2022年6月の米国内分泌学会（ENDO）にてその結果を発表しております。Amolyt社は、IND準備試験を開始しており、2022年中の臨床入りを目標にしています。また、2021年9月16日に、Amolyt社は80万ドルのシリーズB資金調達を実施し、調達資金の一部をAZP-3813の開発に充てることを発表しております。

自社創薬品である、ヘマグルチニン（HA）を標的タンパク質とした抗インフルエンザ特殊環状ペプチド「PD-001」は、インフルエンザウイルスのエンベロープタンパク質であるHAのアミノ酸配列がよく保存されている領域に結合し、H5N1型を含む亜型に対して強力かつ幅広い有効性を示すこと、及びin vivo試験においてタミフル等の既存のインフルエンザ治療薬との併用において高い相乗効果を有することを確認しております。また、PD-001の前臨床試験において問題となる安全性プロファイルは確認されておられません。当社は、PD-001に関心をもつ製薬企業との間で、様々なパートナーリングや導出の可能性を継続的に協議しております。

当社は、これまで様々な炎症性疾患に関して、IL17を含む複数の炎症誘導性サイトカインに対して高い選択的結合能を有するリード化合物候補を取得してきました。当社は、複数の炎症誘導性サイトカインを標的とするMPC医薬品開発に向けて前臨床試験の準備を進めており、また、複数のリード化合物を併用した場合の効果についても検証を進めております。炎症を誘導することが分かっている複数の作用経路を同時に抑制するMPC医薬品が、炎症性疾患に対する有効な治療法として、二重特異性抗体よりも優れた新たなモダリティ治療薬となることを期待しております。

当社は、がんや特定の組織/臓器を標的とした、数多くの当社独自のペプチド候補化合物と、放射性核種やsiRNA、低分子化合物等のペイロードを組み合わせたPDC医薬品の開発を積極的に行っております。当社は、PDRファーマ株式会社を取得したことにより、同事業が有する生体内バイオイメーキング能力も活用し、目的のペイロードが効率的に標的部位に送達したことを検証することで有望な医薬品候補化合物についてより効率的に評価することが可能になるものと考えております。当社はもっとも有望なプログラムを2022年末までに最初の医薬品候補化合物として同定することを目標としております。また、ペプチド-放射性核種複合体において有効なペプチド化合物を取得できれば、放射性核種以外のペイロードと組み合わせたPDC医薬品についても、自社及び様々な既存/新規のパートナーとの共同開発により積極的に検討を行っていきたいと考えております。

当社は、塩野義製薬株式会社、積水化学工業株式会社と合弁で特殊ペプチド原薬の製造プロセスに関する研究開発、製造及び販売を行うCDMO（Contract Development and Manufacturing Organization：医薬品開発製造受託機関）であるペプチスター株式会社（以下 ペプチスター）を2017年9月に設立いたしました。ペプチスターは国内の様々な会社が有する技術を融合し、高品質、高純度でしかも製造コストを大幅に低減する最先端技術を開発、提供することを目指しております。ペプチスターは当社の創薬共同研究開発企業だけでなく、戦略的提携により自社開発品の製造も請け負うことが予想されます。大阪府摂津市に建設を進めていた同社の工場は、当初の計画通り2019年10月から商業生産を開始しております。ペプチスターは2017年10月に国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）と委託環境整備契約を締結した医療研究開発革新基盤創成事業（CiCLE）における課題「特殊ペプチド原薬CMO創設」において計画通り供給体制の基盤構築を達成したことを2019年12月6日に発表しております。ペプチスターは2020年12月1日に、第三者割当増資を実施し、総額1,790百万円の資金調達を行いました。ペプチスターへの当社の出資比率は15%未満となっております。

## 2. 放射性医薬品事業

当社は、2022年3月28日に100%子会社化したPDRファーマ株式会社を通じて、放射性医薬品等の研究・開発・製造・販売を行っております。現在、PDRファーマでは放射性診断薬として、22品目のSPECT（Single Photon Emission Computed Tomography）製剤と、2品目のPET（Positron Emission Tomography）製剤、及び8品目（3製品カテゴリー）の放射性治療薬を販売しております。放射性診断薬は、特定の臓器や組織に集積しやすい特性を持つ化合物に、診断用の放射性核種を結合させ、放射性核種から放出されるガンマ線を収集し画像化することで生体の臓器・組織の異常やがんの診断等に用いられます。診断用途や撮像するカメラに応じてSPECT用、またはPET用の放射性核種が使い分けられています。また、放射性診断薬の画像読影の支援を目的とした画像解析ソフトウェアの開発・提供も行っています。

PDRファーマが販売する主な放射性医薬品は以下のとおりです。

### ・診断用放射性医薬品（SPECT）

販売名	薬効分類名
ニューロライト®注射液 第一	局所脳血流診断薬
カーディオライト®注射液 第一	心臓疾患診断薬・心機能診断薬・副甲状腺疾患診断薬
塩化タリウム-Tl201注射液	心臓疾患診断薬・腫瘍診断薬・副甲状腺疾患診断薬
ミオMIBG®-I123注射液	心交感神経診断薬・神経芽腫診断薬・褐色細胞腫診断薬
テクネ®MDP注射液	骨疾患診断薬・脳腫瘍及び脳血管障害診断薬
ウルトラテクネカウ®	脳・甲状腺・唾液腺及び異所性胃粘膜疾患診断薬・局所肺換気機能診断薬
オクトレオスキャン®静注用セット	神経内分泌腫瘍診断薬

### ・診断用放射性医薬品（PET）

販売名	薬効分類名
アミヴィット®静注	アミロイドイメージング剤
フルデオキシグルコース（ <sup>18</sup> F）静注「FRI」	悪性腫瘍診断薬・虚血性心疾患診断薬・てんかん診断薬

### ・治療用放射性医薬品

販売名	薬効分類名
ライアットMIBG-I131静注	褐色細胞腫・パラガングリオーマ治療薬
ヨウ化ナトリウムカプセル	甲状腺疾患治療薬・甲状腺疾患診断薬
ゼヴァリン®イットリウム（ <sup>90</sup> Y）静注用セット	CD20陽性非ホジキンリンパ腫・マントル細胞リンパ腫治療薬

放射性治療薬は、特定の臓器や組織に集積しやすい特性を持つ化合物に治療用の放射性核種を結合させ、放出されるベータ線やアルファ線等の高いエネルギーの放射線を体内から照射することにより、がん細胞を消失させる治療法です。例えば、特定のがんに対して特異的に集積する化合物に診断用放射性核種、又は治療用放射性核種を結合させ製剤化することで、前者では放射性核種の集積を画像化することでがんを診断し、後者によりがんを治療することが可能となります。これは、治療と診断の組み合わせという趣旨から「セラノスティクス（Theranostics）」とも呼ばれ、身体にやさしく有効性の高い治療法として世界的にも注目されています。

放射性医薬品事業は、放射性核種の取扱いに特殊性があり、例えば、海外の限られた製造所からの放射性核種原料の調達や、製造所における放射線に対する遮蔽技術、核種は時間と共に減衰するために製造後に医療機関への輸送を極めて短い時間で実現するノウハウなど、原料調達・製造・輸送・販売のすべてにおいて高い専門性が必要となります。また、医薬品関連の法令はもちろん、放射性核種の取り扱いに関連する法令への対応も求められています。PDRファーマは、1968年より放射性医薬品事業に従事しており、この領域のパイオニアとして種々のノウハウを



保有しております。PDRファーマは、千葉・神奈川（川崎）・大阪（茨木）の3カ所の生産・研究拠点と、全国9カ所の営業拠点を保有しております。

国内における放射性医薬品市場は、現状においては放射性診断薬が中心ですが、今後は放射性治療薬の成長が期待されています。市場成長を牽引すると考えられているのが、特定の細胞又は組織に選択的に放射性核種を送達する標的型放射線療法です。当社はこれまで、放射性診断薬/放射性治療薬に用いるペプチド-放射性核種複合体に関して、Bristol-Myers Squibb社（放射性診断薬）やBayer社（放射性診断薬）、Novartis社（放射性診断薬/放射性治療薬）、RayzeBio社（放射性診断薬/放射性治療薬）との間で多くの研究開発プログラムを進めてきており、ペプチド-放射性核種複合体の創薬における主要プレーヤーの1社としての地位を確立してまいりました。さらに当社は、自社のPDCプログラムへの注力の一環として、ペプチド-放射性核種複合体の自社パイプライン拡充にも取り組んでおります。

当社グループでは、当社およびPDRファーマの技術、ノウハウおよびネットワークを融合することにより、新たな放射性医薬品の創出、海外からの有望な放射性医薬品の導入などを進めることで放射性医薬品事業の拡大を図ってまいります。

当社グループは、2021年9月17日に、独立行政法人都市再生機構が実施した川崎市殿町国際戦略拠点（キングスカイフロント）の川崎市川崎区殿町三丁目地区（2-11・2-12画地）の土地譲渡人の公募入札に参加し、落札いたしました。キングスカイフロントは、世界的な成長が見込まれるライフサイエンス分野を中心に、世界最高水準の研究開発から新産業を創出するオープンイノベーション拠点として「国家戦略特区」及び「京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区」として指定を受けております。今回落札された土地には、当社の本社・研究所の増設を念頭に建設準備を進めておりましたが、その後、2022年3月に放射性医薬品事業を取得したことに伴い、放射性医薬品事業の機能強化のために活用するニーズが出てきたことから、現在、設計の一部見直しを進めております。これに伴い、2024年に予定しておりました竣工時期についても見直しを検討しております。今後の建設計画につきましては、詳細が決定次第すみやかな公表を予定しております。なお、すでに土地については手元資金により購入しており、今後の建設費用については手元資金ならびに金融機関からの借入による充当を予定しております。

当社グループは、サステナビリティへの取り組みに関して、当社の基本方針、重点取組み、主要ポリシー/データを自社WEBサイト上での専用ページやサステナビリティレポート等にて積極的に情報開示を行っております。またグループとしてのサステナビリティへの取り組みをより推進するため、2022年7月より、PDRファーマでのサステナビリティへの取り組みを検討・推進する「サステナビリティ推進委員会」をPDRファーマ内に新設いたしました。当社グループは、地球環境への配慮、社会・従業員に関する取組み、企業統治（ガバナンス）に関して業界トップクラスの水準を目指して取り組んでまいります。

当社の事業活動におけるGHG排出量（Scope 1 及びScope 2）は主に電力消費に由来しており、これまで再生可能エネルギーへのシフトを積極的に推進する電力会社から電力供給を受けておりました。この取り組みをさらに推進するため、当社本社・研究所で消費する電力を実質CO<sub>2</sub>（二酸化炭素）フリーとなる電力として2022年1月より導入いたしました。これにより、自社事業活動における「カーボンニュートラル」実現の中期目標を4年前倒しで達成いたしました。

当社は、研究開発型のイノベーション企業として、多様性が競争優位性やイノベーションを生み出し、我々のミッション実現につながることを確信しています。特に、従業員一人一人の有する専門性やサイエンティフィックな感性の多様性を重視しており、研究開発及び経営の中核を担う管理職・上級専門職層において、年齢や性別・文化背景に捉われないサイエンススペースの議論や意思決定ができる体制の確保が重要と考えております。その前提となる、中核人材（※1）の多様性を構成する要素として、「博士号（Ph.D.）取得者比率（2021年12月末：55.2%、2030年目標：50%以上）」、「女性マネージャー比率（同：18.4%、同：30%以上）」、「外国人又は海外勤務経験者（※2）比率（同：31.5%、同：30%以上）」、「20～30代比率（同：15.8%、同：30%以上）」の4つの定量指標を設定し、これらの現状及び2030年までの目標数値を定めております。

※1：管理職・上級専門職（役員を除く）

※2：海外での研究・就労経験を有する者（半年未満、または留学を除く）

当社はサステナビリティに関する継続的な取組みにより、各評価機関から高い評価を受けております。環境情報開示に取り組むCDP（カーボン・ディスクロージャー・プロジェクト）では「気候変動プログラム」に2021年から参

加し、スコアB（マネジメントレベル）評価を取得しております。2022年1月には、グローバルな ESG評価機関である Sustainalytics社から、ESGの取り組みに関して業界最高水準にある（評価対象となっているバイオテック企業439社中、世界第二位）との高い評価を受け、「TOP-RATED ESG PERFORMER 2022」を受賞いたしました。2022年4月には、グローバルインデックスプロバイダーである FTSE Russellにより構築されたFTSE Blossom Japan Sector Relative Indexの構成銘柄として選定されました。なお、FTSE Blossom Japan Sector Relative Indexは、公的年金を運用する年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）の国内株式を対象とするESG総合指数としても新たに採用されたことが 2022年3月30日付で発表されております。

当社グループの従業員は2022年6月30日現在で680名（ペプチドリーム株式会社：197名、PDRファーマ株式会社：483名、派遣を含む。女性社員比率は約25.7%）となっております。当社グループは取締役12名を含めると総勢692名の体制となりました。

以上の結果、当第2四半期連結累計期間における創薬開発事業の経営成績については、売上収益1,118,323千円（前年同期比1,798,622千円減少）、営業損失1,389,094千円（前年同四半期は営業利益436,230千円）、放射性医薬品事業の経営成績については、売上収益3,906,073千円、営業利益197,529千円となり、当社グループ全体としては売上収益は5,024,397千円（前年同四半期比2,107,450千円増加）、Core営業損失1,180,034千円（前年同四半期はCore営業利益436,230千円）、営業損失1,559,688千円（前年同四半期は営業利益436,230千円）、税引前四半期損失1,484,964千円（前年同四半期は税引前四半期利益312,177千円）、親会社の所有者に帰属する四半期損失1,056,081千円（前年同四半期比1,047,745千円増加）となりました。

当社グループは、IFRS業績に加えて、会社の経常的な収益性を示す指標として非経常的な項目をNon-Core調整として除外したCoreベースの業績を開示しています。当該Coreベースの業績は、IFRS業績から当社グループが定める非経常的な項目を調整項目として除外したものです。

Core営業利益は営業利益から企業買収に係る会計処理の影響及び買収関連費用、有形固定資産、無形資産及びのれんに係る減損損失、損害賠償や和解等に伴う損益、非経常的かつ多額の損益、個別製品又は開発品導入による無形資産の償却費を控除して算出しております。

なお、Core営業利益から営業利益への調整は以下の通りです。

（単位：千円）

	2021年12月期 第2四半期	2022年12月期 第2四半期	前年同期比	%
Core営業利益（△損失）	436,230	△1,180,034	△1,616,265	—
企業買収に係る会計処理の影響 及び買収関連費用	—	368,122	368,122	—
有形固定資産、無形資産及び のれんに係る減損損失	—	—	—	—
損害賠償や和解等に伴う損益	—	—	—	—
非経常的かつ多額の損益	—	—	—	—
個別製品又は開発品導入による 無形資産の償却費	—	11,531	11,531	—
営業利益（△損失）	436,230	△1,559,688	△1,995,919	—



## (2) 財政状態に関する説明

### ①財政状態の分析

当第2四半期連結会計期間の総資産は51,895,583千円となり、前連結会計年度末と比べて24,860,987千円増加しました。その主な要因は、現金及び現金同等物が5,373,721千円減少したものの、有形固定資産が11,193,486千円増加、のれんが11,259,562千円増加したこと等によるものです。資産の増加には、PDRファーマ株式会社の新規連結による増加が含まれております。

負債は27,156,230千円となり、前連結会計年度末と比べて25,471,884千円増加しました。その主な要因は、借入金が21,641,498千円増加したこと等によるものです。負債の増加には、PDRファーマ株式会社の新規連結による増加が含まれております。

資本は24,739,352千円となり、前連結会計年度末と比べて610,897千円減少しました。その主な要因は、四半期損失により利益剰余金が1,056,081千円減少したこと等によるものです。

### ②キャッシュ・フローの状況

当第2四半期連結累計期間における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ5,373,721千円減少し、6,372,808千円となりました。

当第2四半期連結累計期間における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は、次のとおりであります。

#### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、営業債務及びその他の債務の増減額597,710千円の計上等があったものの、税引前四半期損失1,484,964千円の計上等により、9,837千円の支出(前年同四半期は4,959,002千円の収入)となりました。

#### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、子会社の取得による支出23,460,335千円等により、26,679,922千円の支出(前年同四半期比26,229,612千円の支出増加)となりました。

#### (財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入れによる収入22,400,000千円等により、21,557,472千円の収入(前年同四半期比21,512,888千円の収入増加)となりました。

(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明

2022年5月12日に発表いたしました2022年12月期通期連結業績予想から、下表のとおり修正いたしました。

2022年12月期通期連結業績予想数値の修正

(単位：百万円)

	売上収益	Core営業利益	営業利益	税引前利益
前回発表予想 (A)	24,500	—	—	—
今回修正予想 (B)	24,500	6,600	—	—
増減額 (B-A)	—	—	—	—
増減率 (%)	—	—	—	—
2021年12月期実績	9,422	4,093	4,066	3,803

なお、営業利益及び税引前利益の通期予想に関しましては、2022年3月28日付でPDRファーマ株式会社を取得したことに伴う取得原価の配分等、業績に与える影響を精査中であり、確定次第開示を予定しております。

【主要な連結経営指標】

	2020年12月期 通期実績	2021年12月期 第2四半期実績	2021年12月期 実績	2022年12月期 第2四半期実績	2022年12月期 予想
	2020年1月 ～ 2020年12月	2021年1月 ～ 2021年6月	2021年1月 ～ 2021年12月	2022年1月 ～ 2022年6月	2022年1月 ～ 2022年12月
設備投資 (百万円)	566	350	1,300	3,088	3,860
減価償却費 (百万円)	559	305	633	746	—
研究開発費 (百万円)	1,460	748	1,638	1,154	3,165
期末人員数 (人)	157	175	177	692	696

(注) 1. 設備投資額は、実際に支払う金額を表示しております。

2. 2021年12月期実績の設備投資額には土地の取得に要する前払金(644百万円)を含んでおります。

3. 2022年12月期第1四半期実績より国際会計基準(IFRS)を適用しており、グループ全体の主要な経営指標を記載しております。

4. 2022年12月期の減価償却費予想については、2022年3月28日付でPDRファーマ株式会社を取得したことに伴う取得原価の配分等及び業績に与える影響を精査中であり、確定次第開示いたします。

当社は2021年3月25日に、2021年度から2026年度までを新たな目標期間とする、新中期目標を発表いたしました。治療薬（診断薬は含まない）の上市が4件以上、臨床開発プログラムは32件以上、また創薬研究プログラムは160件以上まで増加する見通しをもっております。各プログラムをしっかりと進めていくため、高い専門性をもつ人材についても積極的に採用を進めてまいります。また、「Drug Discovery Powerhouse」としての当社の立ち位置をより強固なものにしていくため、パートナーネットワークをさらに拡充するとともに、そのエコシステムの中心的ハブとしての当社の役割を継続的に拡大してまいります（※1）。

中期目標（2026年12月期末）		2022年6月末時点
(1) 治療薬の上市品数※2	4件以上	0件
(2) 臨床開発プログラム数	32件以上	4件
(3) 創薬研究プログラム数	160件以上	120件
(4) 2026年12月期末時点の人員数	220名以上	204名
(5) 「Drug Discovery Powerhouse」としての基盤確立		

※1 ペプチドリーム株式会社単体の目標となります

※2 治療薬以外の製品、及び診断薬は含まない

また、今後の5年間で「Drug Discovery Powerhouse」としての基盤をしっかりと確立していくため、以下の5つの重点目標に向けた取組みを推進してまいります。

- ①ペプチド創薬におけるエコシステム&パートナーネットワークの発展拡大をリードし、その中心的ハブとしての当社の役割を継続的に拡大
- ②「世界で最も広く活用される創薬基盤技術」として、当社独自のペプチド創薬開発プラットフォームシステム（PDPS）のライセンス先を継続的に拡大
- ③安全安心でかつ多様性を尊重し合う職場環境の中、すべての社員が新たなチャレンジへの機会を与えられ、その能力を最大限発揮できる「最高の場」を実現
- ④機動性の高い経営体制を推進するとともに、規範遵守や執行の監督機能とのバランス、及び社内外ステークホルダーとの継続的対話による透明性の高い経営を実現
- ⑤社会全体の持続的成長に向けて事業活動の効率化を促進し、水や廃棄物の環境負荷を最小化するとともに、2026年までに自社事業活動の「カーボンニュートラル」を実現

2. 要約四半期連結財務諸表及び主な注記

(1) 要約四半期連結財政状態計算書

(単位：千円)

	移行日 (2021年1月1日)	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当第2四半期 連結会計期間 (2022年6月30日)
資産			
流動資産			
現金及び現金同等物	7,149,358	11,746,529	6,372,808
営業債権及びその他の債権	7,530,584	811,096	5,437,622
その他の金融資産	6,241	69,047	420,340
棚卸資産	585,981	925,138	2,232,348
未収法人所得税等	-	10,415	405,369
その他の流動資産	369,353	274,197	593,712
流動資産合計	15,641,519	13,836,425	15,462,202
非流動資産			
有形固定資産	5,766,856	6,437,151	17,630,637
のれん	-	-	11,259,562
無形資産	78,683	75,502	348,449
持分法で会計処理されている 投資	294,927	603,003	493,031
その他の金融資産	3,800,421	6,080,133	6,461,393
繰延税金資産	549,646	-	-
退職給付に係る資産	-	-	200,217
その他の非流動資産	8,921	2,379	40,088
非流動資産合計	10,499,457	13,198,170	36,433,380
資産合計	26,140,976	27,034,596	51,895,583

(単位：千円)

	移行日 (2021年1月1日)	前連結会計年度 (2021年12月31日)	当第2四半期 連結会計期間 (2022年6月30日)
負債及び資本			
負債			
流動負債			
営業債務及びその他の債務	2,562,788	886,124	2,890,047
借入金	-	-	2,187,893
その他の金融負債	-	-	291,658
未払法人所得税等	1,586,784	14,404	20,258
引当金	-	-	10,962
その他の流動負債	712,595	475,517	964,283
流動負債合計	4,862,168	1,376,047	6,365,102
非流動負債			
借入金	-	-	19,453,605
その他の金融負債	-	-	436,583
繰延税金負債	-	308,298	756,368
退職給付に係る負債	-	-	144,570
非流動負債合計	-	308,298	20,791,128
負債合計	4,862,168	1,684,345	27,156,230
資本			
資本金	3,933,885	3,956,738	3,956,738
資本剰余金	10,305,306	4,452,358	4,451,502
自己株式	△655,383	△620,123	△607,255
利益剰余金	7,503,531	16,372,687	15,316,606
その他の資本の構成要素	191,468	1,188,589	1,621,761
親会社の所有者に帰属する持分 合計	21,278,808	25,350,250	24,739,352
資本合計	21,278,808	25,350,250	24,739,352
負債及び資本合計	26,140,976	27,034,596	51,895,583



(2) 要約四半期連結損益計算書及び要約四半期連結包括利益計算書

要約四半期連結損益計算書

第2四半期連結累計期間

(単位：千円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 2021年1月1日 至 2021年6月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2022年1月1日 至 2022年6月30日)
売上収益	2,916,946	5,024,397
売上原価	962,469	3,003,772
売上総利益	1,954,476	2,020,624
販売費及び一般管理費	776,214	2,425,234
研究開発費	770,906	1,154,597
その他の収益	29,054	518
その他の費用	179	1,000
営業利益(△損失)	436,230	△1,559,688
金融収益	235,513	250,800
金融費用	-	66,104
持分法による投資損失(△)	△359,567	△109,972
税引前四半期利益(△損失)	312,177	△1,484,964
法人所得税費用	320,513	△428,883
四半期損失(△)	△8,335	△1,056,081
四半期利益の帰属		
親会社の所有者	△8,335	△1,056,081
四半期損失(△)	△8,335	△1,056,081
1株当たり四半期利益		
基本的1株当たり四半期損失(△)	△0.07	△8.13
希薄化後1株当たり四半期損失(△)	△0.07	△8.13

要約四半期連結包括利益計算書  
第2四半期連結累計期間

(単位：千円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 2021年1月1日 至 2021年6月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2022年1月1日 至 2022年6月30日)
四半期損失(△)	△8,335	△1,056,081
その他の包括利益		
純損益に振り替えられることのない項目		
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する金融資産	884,151	433,171
純損益に振り替えられることのない 項目合計	884,151	433,171
その他の包括利益	884,151	433,171
四半期包括利益	875,816	△622,909
四半期包括利益の帰属		
親会社の所有者	875,816	△622,909
四半期包括利益	875,816	△622,909

(注) 上記の計算書の項目は税引後で開示しております。

(3) 要約四半期連結持分変動計算書

前第2四半期連結累計期間(自 2021年1月1日 至 2021年6月30日)

(単位:千円)

	親会社の所有者に帰属する持分					合計	合計
	資本金	資本剰余金	自己株式	利益剰余金	その他の資本の構成要素		
2021年1月1日時点の残高	3,933,885	10,305,306	△655,383	7,503,531	191,468	21,278,808	21,278,808
四半期損失(△)	-	-	-	△8,335	-	△8,335	△8,335
その他の包括利益	-	-	-	-	884,151	884,151	884,151
四半期包括利益合計	-	-	-	△8,335	884,151	875,816	875,816
新株の発行	22,852	22,852	-	-	-	45,704	45,704
自己株式の取得	-	-	△362	-	-	△362	△362
自己株式の処分	-	-	30,584	-	-	30,584	30,584
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	-	-	-	△24,175	24,175	-	-
株式報酬取引	-	385,355	-	-	-	385,355	385,355
所有者との取引額合計	22,852	408,208	30,221	△24,175	24,175	461,282	461,282
2021年6月30日時点の残高	3,956,738	10,713,515	△625,162	7,471,019	1,099,795	22,615,906	22,615,906

当第2四半期連結累計期間(自 2022年1月1日 至 2022年6月30日)

(単位:千円)

	親会社の所有者に帰属する持分					合計	合計
	資本金	資本剰余金	自己株式	利益剰余金	その他の資本の構成要素		
2022年1月1日時点の残高	3,956,738	4,452,358	△620,123	16,372,687	1,188,589	25,350,250	25,350,250
四半期損失(△)	-	-	-	△1,056,081	-	△1,056,081	△1,056,081
その他の包括利益	-	-	-	-	433,171	433,171	433,171
四半期包括利益合計	-	-	-	△1,056,081	433,171	△622,909	△622,909
自己株式の取得	-	-	△87	-	-	△87	△87
自己株式の処分	-	-	12,956	-	-	12,956	12,956
株式報酬取引	-	△856	-	-	-	△856	△856
所有者との取引額合計	-	△856	12,868	-	-	12,012	12,012
2022年6月30日時点の残高	3,956,738	4,451,502	△607,255	15,316,606	1,621,761	24,739,352	24,739,352

(4) 要約四半期連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 2021年1月1日 至 2021年6月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2022年1月1日 至 2022年6月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前四半期利益(△損失)	312,177	△1,484,964
減価償却費及び償却費	305,498	746,539
受取利息及び受取配当金	△175	△1,049
支払利息	-	66,104
為替差損益(△は益)	△75,987	241,433
持分法による投資損益(△は益)	359,567	109,972
営業債権及びその他の債権の増減額 (△は増加)	7,285,072	△135,091
棚卸資産の増減額(△は増加)	△171,382	△275,141
営業債務及びその他の債務の増減額 (△は減少)	△1,643,432	597,710
退職給付に係る資産及び負債の増減額	-	80,852
その他	174,168	139,828
小計	6,545,505	86,193
利息及び配当金の受取額	175	1,049
利息の支払額	-	△51,805
法人所得税の支払額	△1,586,809	△56,233
法人所得税の還付額	131	10,958
営業活動によるキャッシュ・フロー	4,959,002	△9,837
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の売却による収入	145,222	-
子会社の取得による支出	-	△23,460,335
関係会社への貸付けによる支出	△414,097	-
貸付金の回収による収入	3,120	65,926
補助金の受取額	136,323	-
有形固定資産の取得による支出	△316,109	△3,218,559
無形資産の取得による支出	△4,770	△58,228
その他	-	△8,724
投資活動によるキャッシュ・フロー	△450,310	△26,679,922
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	-	22,400,000
長期借入金の返済による支出	-	△560,000
借入手数料の支払額	-	△212,800
リース負債の返済による支出	-	△69,639
新株予約権の行使に伴う株式の発行による収入	44,940	-
自己株式の取得による支出	△356	△87
財務活動によるキャッシュ・フロー	44,583	21,557,472
現金及び現金同等物に係る換算差額	75,987	△241,433
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	4,629,263	△5,373,721
現金及び現金同等物の期首残高	7,149,358	11,746,529
現金及び現金同等物の四半期末残高	11,778,622	6,372,808

(5) 要約四半期連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

該当事項はありません。

(セグメント情報)

(1) 報告セグメントの概要

前第2四半期連結累計期間においては、当社グループは、創薬開発事業のみの単一セグメントであるため、報告セグメント別の記載を省略しております。なお、第1四半期連結累計期間より、従来の「アライアンス事業」のセグメント名称を「創薬開発事業」に変更しております。当該変更は、より事業の内容を明確にするため、名称のみの変更であり、セグメント情報に与える影響はありません。これに伴い、前第2四半期連結累計期間につきましても、変更後の名称で記載しております。

また、当社は、当第1四半期の2022年3月28日において、富士フィルム富山化学株式会社から放射性医薬品事業を吸収分割により承継する新会社であるPDRファーマ株式会社の株式を100%取得したことに伴い、当第2四半期連結会計期間以降において、当社の取締役会は、経営資源の配分の決定及び業績の評価をするために、「創薬開発事業」と「放射性医薬品事業」の2つの報告セグメントを定期的にモニタリングしております。そのため、当第2四半期連結会計期間以降当社グループは、「創薬開発事業」と「放射性医薬品事業」の2つの報告セグメントに区分しております。

【報告セグメントの内容】

報告セグメント	事業内容
創薬開発事業	創薬開発事業として、当社は当社独自の創薬プラットフォームシステムであるPDPSを中核とした創薬基盤技術を活用した①創薬共同研究開発、②PDPSの技術ライセンス、③戦略的提携による自社パイプラインの拡充を行っております。
放射性医薬品事業	放射性医薬品事業として、心臓、脳の血流やがんの骨転移などを検査する診断用放射性医薬品（SPECT用診断薬、PET用診断薬）及び褐色細胞腫等のアンメットメディカルニーズに対応する治療用放射性医薬品の研究開発から製造販売までを行っております。



(2) セグメント収益及び業績

当社グループの報告セグメントによる収益及び業績は以下のとおりであります。なお、セグメント間の売上収益は、市場実勢価格に基づいております。

前第2四半期連結累計期間（自 2021年1月1日 至 2021年6月30日）

前第2四半期連結累計期間における当社グループは創薬開発事業のみの単一セグメントのため、記載を省略しております。

当第2四半期連結累計期間（自 2022年1月1日 至 2022年6月30日）

(単位：千円)

	報告セグメント			調整額	連結
	創薬開発事業	放射性医薬品事業	計		
売上収益					
外部顧客への売上収益	1,118,323	3,906,073	5,024,397	—	5,024,397
セグメント間収益	—	—	—	—	—
合計	1,118,323	3,906,073	5,024,397	—	5,024,397
セグメント利益	△1,389,094	197,529	△1,191,565	—	△1,191,565
(調整項目)					
企業結合関連費用 (注1)					368,122
営業利益					△1,559,688
金融収益					250,800
金融費用					66,104
持分法による投資損益					△109,972
税引前利益					△1,484,964

(注1) 企業結合関連費用には、企業結合による取得関連費用368,122千円が含まれております。

(初度適用)

(1) IFRSに基づく財務報告への移行

当社グループは、当第1四半期連結会計期間からIFRSに準拠した要約四半期連結財務諸表を開示しております。日本基準に準拠して作成された直近の財務諸表は2021年12月31日に終了する事業年度に関するものであり、IFRSへの移行日は2021年1月1日です。

(2) IFRS第1号の免除規定

IFRSでは、IFRSを初めて適用する会社（以下、初度適用企業）に対して、原則として、IFRSで要求される基準を遡及して適用することを求めています。ただし、IFRS第1号「国際財務報告基準の初度適用」（以下、IFRS第1号）では、IFRSで要求される基準の一部について強制的に免除規定を適用しなければならないものと任意に免除規定を適用するものを定めております。これらの規定の適用に基づく影響は、IFRS移行日において利益剰余金、又はその他の資本の構成要素で調整しております。当社グループが日本基準からIFRSへ移行するにあたり、採用した免除規定は以下のとおりです。

・リース

IFRS第1号では、初度適用企業は、IFRS移行日時点で存在する契約にリースが含まれているかどうかを、同日時点で存在する事実及び状況に基づいて判定することが認められております。また、リース負債を、残りのリース料を移行日現在の借手の追加借入利率で割り引いた現在価値で測定し、使用権資産を、リース負債と同額とすることが認められております。リース期間が移行日から12ヶ月以内に終了するリース及び原資産が少額であるリースについて、費用として認識することが認められております。

当社グループは、当該免除規定を適用し、リースの認識及び測定を行っております。

・移行日以前に認識した金融商品の指定

IFRS第1号では、IFRS第9号「金融商品」（以下、「IFRS第9号」）における分類について、当初認識時点で存在する事実及び状況ではなく、移行日時点の事実及び状況に基づき判断することが認められております。また、移行日に存在する事実及び状況に基づき資本性金融商品をその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産として指定することが認められております。

当社グループは、IFRS第9号における分類について、移行日時点で存在する事実及び状況に基づき判断を行っており、資本性金融商品についてその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産として指定しております。

・金融商品の当初認識時の公正価値の測定

IFRS第9号の金融資産及び負債の当初認識時における公正価値測定及び利得又は損失の認識に関する規定について、当社グループは将来に向かって適用することを選択しております。

・IFRS第15号の経過措置の適用

IFRS第15号「顧客との契約から生じる収益」（以下、「IFRS第15号」という。）では、初度適用企業に対して、最初の報告期間の期首現在で完了している契約及び期首以前に条件変更された契約については修正再表示しないことが認められています。当社グループは、当該実務上の便法を適用し、最初の報告期間の期首である2021年1月1日現在で完了している契約及び同日よりも前に条件変更された契約については修正再表示を行っておりません。

・株式に基づく報酬

IFRS第1号では、2002年11月7日以後に付与され、IFRS移行日より前に権利確定した株式報酬に対して、IFRS第2号「株式に基づく報酬」（以下、「IFRS第2号」という。）を適用することを奨励しておりますが、要求はされておられません。

当社グループは、移行日より前に権利確定した株式報酬に対しては、IFRS第2号を適用しないことを選択しております。

(3) IFRS第1号の強制的な例外規定

IFRS第1号では、「見積り」、「金融資産及び金融負債の認識の中止」、「ヘッジ会計」、「非支配持分」及び「金融資産の分類及び測定」等について、IFRSの遡及適用を禁止しております。当社グループはこれらの項目について移行日より将来に向かって適用しております。

(4) 日本基準からIFRSへの調整表

当社グループは、IFRSに基づく連結財務諸表の作成において、日本基準に基づく単体財務諸表で報告していた金額を調整しております。IFRSの初度適用において開示が求められる調整は以下のとおりであります。なお、当社グループには日本基準に準拠して公表された直近の連結財務諸表がないため、日本基準に準拠して作成された単体財務諸表上の金額からの調整を表示しております。また、当該単体財務諸表には、その他の包括利益が表示されないため、その他の包括利益に対する調整は表示しておりません。

当該調整が当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に与える影響は、以下のとおりです。なお、調整表の「表示組替」には利益剰余金及び包括利益に影響を及ぼさない項目を、「認識・測定の差異」には利益剰余金及び包括利益に影響を及ぼす項目を含めて表示しております。

IFRS移行日(2021年1月1日)現在の資本に対する調整

(単位:千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
資産の部						資産
流動資産						流動資産
現金及び預金	7,149,358	-	-	7,149,358	①	現金及び現金同等物
売掛金	5,655,460	1,875,123	-	7,530,584	②	営業債権及びその他の債権
	-	585,981	-	585,981		棚卸資産
貯蔵品	585,981	△585,981	-	-		
前払費用	253,843	△253,843	-	-		
未収入金	1,875,123	△1,875,123	-	-		
その他	121,753	247,601	△1	369,353		その他の流動資産
	-	6,241	-	6,241		その他の金融資産
流動資産合計	15,641,520	-	△1	15,641,519		流動資産合計
固定資産						非流動資産
有形固定資産(注1)	5,766,856	-	-	5,766,856		有形固定資産
無形固定資産(注1)	78,683	-	-	78,683		無形資産
投資有価証券	3,413,342	△3,413,342	-	-		
関係会社株式	691,445	-	△396,517	294,927	D	持分法で会計処理されている投資
長期貸付金	89,598	△89,598	-	-		
関係会社長期貸付金	62,805	△62,805	-	-		
長期前払費用	8,921	△8,921	-	-		
繰延税金資産	505,013	-	44,632	549,646	E	繰延税金資産
	-	3,574,286	226,134	3,800,421	③ B	その他の金融資産
その他	8,541	380	-	8,921		その他の非流動資産
固定資産合計	10,625,208	-	△125,750	10,499,457		非流動資産合計
資産合計	26,266,729	-	△125,752	26,140,976		資産合計

(注) 1. 有形固定資産及び無形固定資産について、従来の日本基準では固定資産の種類ごとに取得原価と減価償却累計額を総額で開示しておりましたが、当該調整表上は、有形固定資産及び無形固定資産に集約し、帳簿価額で表示しております。

(単位：千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
						負債及び資本
負債の部						負債
流動負債						流動負債
買掛金	55,276	2,484,704	22,808	2,562,788	④ C	営業債務及びその他の債務
未払金	1,895,157	△1,895,157	-	-		
未払費用	589,546	△589,546	-	-		
未払法人税等	1,709,327	△122,543	-	1,586,784		未払法人所得税等
前受金	319,944	△319,944	-	-		
預り金	136,777	△136,777	-	-		
その他	-	579,265	133,330	712,595	⑤ A F	その他の流動負債
流動負債合計	4,706,030	-	156,138	4,862,168		流動負債合計
固定負債						
株式給付引当金	59,743	-	△59,743	-	G	
役員株式給付引当金	283,951	-	△283,951	-	G	
固定負債合計	343,694	-	△343,694	-		非流動負債合計
負債合計	5,049,724	-	△187,556	4,862,168		負債合計
純資産の部						資本
資本金	3,933,885	-	-	3,933,885		資本金
資本剰余金	3,930,167	84,604	6,290,534	10,305,306	G	資本剰余金
自己株式	△655,383	-	-	△655,383		自己株式
利益剰余金	13,936,858	-	△6,433,327	7,503,531	I	利益剰余金
その他有価証券評価 差額金	△13,128	-	204,596	191,468		その他の資本の構成 要素
新株予約権	84,604	△84,604	-	-		
純資産合計	21,217,004	-	61,803	21,278,808		資本合計
負債純資産合計	26,266,729	-	△125,752	26,140,976		負債及び資本合計

前第2四半期連結会計期間(2021年6月30日)現在の資本に対する調整

(単位:千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
資産の部						資産
流動資産						流動資産
現金及び預金	11,778,622	-	-	11,778,622	①	現金及び現金同等物
売掛金	109,188	-	-	109,188	②	営業債権及びその他の債権
	-	757,363	-	757,363		棚卸資産
貯蔵品	757,363	△757,363	-	-		
前払費用	162,425	△162,425	-	-		
その他	35,031	156,183	△11,567	179,646		その他の流動資産
	-	6,241	-	6,241		その他の金融資産
流動資産合計	12,842,631	-	△11,567	12,831,063		流動資産合計
固定資産						非流動資産
有形固定資産 (注1)	5,827,186	-	-	5,827,186		有形固定資産
無形固定資産 (注1)	67,985	-	-	67,985		無形資産
投資有価証券	3,930,072	△3,930,072	-	-		
関係会社株式	691,445	-	△528,377	163,067	D	持分法で会計処理されている投資
長期貸付金	86,477	△86,477	-	-		
関係会社長期貸付金	476,902	△476,902	-	-		
長期前払費用	8,149	△8,149	-	-		
繰延税金資産	323,030	-	△185,296	137,734	E	繰延税金資産
	-	4,504,306	1,223,027	5,727,333		その他の金融資産
その他	10,854	△2,704	-	8,149	③ B	その他の非流動資産
固定資産合計	11,422,104	-	509,353	11,931,458		非流動資産合計
資産合計	24,264,735	-	497,786	24,762,522		資産合計

(注) 1. 有形固定資産及び無形固定資産について、従来の日本基準では固定資産の種類ごとに開示しておりましたが、当該調整表上は、有形固定資産及び無形固定資産に集約して表示しております。

(単位：千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
						負債及び資本
負債の部						負債
流動負債						流動負債
買掛金	112,920	502,535	34,689	650,144	④ C	営業債務及びその他の債務
未払金	216,450	△216,450	-	-		
未払費用	286,084	△286,084	-	-		
未払法人税等	126,281	△33,197	205,098	298,181		未払法人所得税等
前受金	983,453	△983,453	-	-		
預り金	19,473	△19,473	-	-		
その他	60,247	1,036,124	101,917	1,198,289	⑤ A F	その他の流動負債
流動負債合計	1,804,911	-	341,704	2,146,615		流動負債合計
固定負債						
株式給付引当金	59,743	-	△59,743	-	G	
役員株式給付引当金	253,373	-	△253,373	-	G	
固定負債合計	313,116	-	△313,116	-		非流動負債合計
負債合計	2,118,027	-	28,587	2,146,615		負債合計
純資産の部						資本
資本金	3,956,738	-	-	3,956,738		資本金
資本剰余金	3,953,020	84,000	6,676,495	10,713,515	G	資本剰余金
自己株式	△625,162	-	-	△625,162		自己株式
利益剰余金	14,707,388	-	△7,236,368	7,471,019	I	利益剰余金
その他有価証券評価 差額金	70,723	-	1,029,072	1,099,795		その他の資本の構成 要素
新株予約権	84,000	△84,000	-	-		
純資産合計	22,146,707	-	469,198	22,615,906		資本合計
負債純資産合計	24,264,735	-	497,786	24,762,522		負債及び資本合計



前連結会計年度(2021年12月31日)現在の資本に対する調整

(単位:千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
資産の部						資産
流動資産						流動資産
現金及び預金	11,746,529	-	-	11,746,529	①	現金及び現金同等物
売掛金	810,818	277	-	811,096	②	営業債権及びその他の の債権
	-	925,138	-	925,138		棚卸資産
貯蔵品	925,138	△925,138	-	-		
前払費用	62,891	△62,891	-	-		
関係会社短期貸付金	62,805	△62,805	-	-		
その他	255,119	45,955	△26,877	274,197	H	その他の流動資産
	-	69,047	-	69,047		その他の金融資産
	-	10,415	-	10,415		未収法人所得税等
流動資産合計	13,863,303	-	△26,877	13,836,425		流動資産合計
固定資産						非流動資産
有形固定資産 (注1)	6,437,151	-	-	6,437,151		有形固定資産
無形固定資産 (注1)	75,502	-	-	75,502		無形資産
投資有価証券	4,003,553	△4,003,553	-	-		
関係会社株式	1,634,710	-	△1,031,706	603,003	D	持分法で会計処理さ れている投資
長期貸付金	83,355	△83,355	-	-		
関係会社長期貸付金	414,097	△414,097	-	-		
長期前払費用	2,379	△2,379	-	-		
繰延税金資産	93,956	-	△93,956	-	E	繰延税金資産
	-	4,512,165	1,567,967	6,080,133	③ B	その他の金融資産
その他	11,159	△8,779	-	2,379		その他の非流動資産
固定資産合計	12,755,865	-	442,304	13,198,170		非流動資産合計
資産合計	26,619,168	-	415,427	27,034,596		資産合計

(注) 1. 有形固定資産及び無形固定資産について、従来の日本基準では固定資産の種類ごとに取得原価と減価償却累計額を総額で開示しておりましたが、当該調整表上は、有形固定資産及び無形固定資産に集約し、帳簿価額で表示しております。

(単位：千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
負債の部						負債及び資本
流動負債						負債
買掛金	100,868	762,130	23,126	886,124	④ C	流動負債
未払金	313,524	△313,524	-	-		営業債務及びその他の債務
未払費用	448,605	△448,605	-	-		
未払法人税等	42,523	△28,118	-	14,404		未払法人所得税等
前受金	244,063	△244,063	-	-		
預り金	122,093	△122,093	-	-		
その他	-	394,275	81,241	475,517	⑤ A F	その他の流動負債
流動負債合計	1,271,679	-	104,367	1,376,047		流動負債合計
固定負債						非流動負債
株式給付引当金	68,021	-	△68,021	-	G	
役員株式給付引当金	280,873	-	△280,873	-	G	
	-	-	308,298	308,298	E	繰延税金負債
固定負債合計	348,894	-	△40,595	308,298		非流動負債合計
負債合計	1,620,573	-	63,772	1,684,345		負債合計
純資産の部						資本
資本金	3,956,738	-	-	3,956,738		資本金
資本剰余金	3,953,020	21,490	477,848	4,452,358	G	資本剰余金
自己株式	△620,123	-	-	△620,123		自己株式
利益剰余金	17,543,266	-	△1,170,579	16,372,687	I	利益剰余金
その他有価証券評価 差額金	144,204	-	1,044,385	1,188,589		その他の資本の構成 要素
新株予約権	21,490	△21,490	-	-		
純資産合計	24,998,595	-	351,655	25,350,250		資本合計
負債純資産合計	26,619,168	-	415,427	27,034,596		負債及び資本合計

## 資本の調整に関する注記

### (連結範囲の変更)

当社グループについて、日本基準ではBBT、J-ESOPの株式給付信託を連結しておらず、単体財務諸表を開示しておりましたが、IFRSでは、株式給付信託を連結しているため、連結財務諸表を開示しております。

### (表示の組替)

#### ① 現金及び現金同等物

日本基準では区分掲記していた「現金及び預金」について、IFRSでは「現金及び現金同等物」に組替えております。

#### ② 営業債権及びその他の債権

日本基準では流動資産の「未収入金」について、IFRSでは「営業債権及びその他の債権」に組替えております。

#### ③ その他の金融資産の振替

日本基準では区分掲記していた「投資有価証券」「長期貸付金」及び「関係会社長期貸付金」については、IFRSでは「その他の金融資産（非流動）」に振替えて表示しております。

#### ④ 営業債務及びその他の債務

日本基準では区分掲記していた「買掛金」「未払金」及び「未払費用」について、IFRSでは「営業債務及びその他の債務」に組替えております。

#### ⑤ その他の流動負債

日本基準では区分掲記していた「前受金」について、IFRSでは「その他の流動負債」に組替えております。

### (認識・測定の差異)

#### A) 収益認識時点の変更に伴うその他の負債等の調整

日本基準では一時点で収益を認識していた一部の取引について、IFRSでは履行義務の充足に応じて収益認識するように変更したため、その他の流動負債に計上されております前受金を調整しております。

#### B) その他の金融資産に対する調整

非上場株式について、日本基準では取得原価を基礎として計上し、発行会社の財政状態の悪化に応じて減損処理を行っておりましたが、IFRSではその他の包括利益を通じて公正価値で測定しております。

#### C) 賦課金に関する調整

日本基準では納税通知書等に基づき計上していた固定資産税等の賦課金について、IFRSでは支払義務が発生した時点で支払見込額を認識しております。

#### D) 持分法に関する調整

日本基準では上記にも記載のとおり連結財務諸表を開示しておらず、関連会社について持分法を適用しておりませんでした。IFRSでは、連結財務諸表を開示したうえで、関連会社について持分法を適用しております。

#### E) 繰延税金資産及び繰延税金負債に対する調整

IFRSの適用に伴い、全ての繰延税金資産の回収可能性を再検討しております。また、日本基準からIFRSへの調整に伴い一時差異が発生したことにより、繰延税金資産及び繰延税金負債の金額を調整しております。

#### F) 未払有給休暇の計上額の調整

日本基準では会計処理が求められていなかった未消化の有給休暇について、IFRSでは未払有給休暇として計上したうえで、「その他の流動負債」として認識しております。

G) 株式報酬

株式報酬制度（BBT及びJ-ESOP）について、日本基準では要給付見込額を引当金として認識しておりましたが、IFRSでは公正価値に基づいて費用を認識するとともに、持分決済型の株式報酬として同額を資本の増加として認識しております。

有償ストック・オプションについては、日本基準では費用を認識しておりませんでした。IFRSでは権利確定条件の付されたストック・オプションのうち株式市場条件以外の条件が付されたストック・オプションについては、株式市場条件以外の権利確定条件を反映した権利確定すると見込まれる数及び公正価値に基づいて測定した金額を費用処理しております。

H) 取得関連費用

企業結合に係る取得関連費用は、日本基準では単体財務諸表において資産として計上しておりましたが、IFRSにおいては、発生時に費用処理しております。

I) 利益剰余金に対する調整

(単位：千円)

	移行日 (2021年1月1日)	前第2四半期 連結会計期間 (2021年6月30日)	前連結会計年度 (2021年12月31日)
収益認識に関する調整	△56,250	△18,750	-
賦課金に関する調整	△22,809	△46,256	△23,128
持分法による調整	△459,322	△818,889	△1,031,706
繰延税金資産及び繰延税金負債に対する調整	81,227	48,761	81,192
未払有給休暇の計上額の調整	△77,080	△83,167	△81,241
株式報酬	△5,946,839	△6,363,378	△128,954
取得関連費用	-	-	△26,875
小計	△6,481,075	△7,281,680	△1,210,713
税効果による調整	47,747	45,311	40,134
合計	△6,433,327	△7,236,368	△1,170,579

前第2四半期連結累計期間（自 2021年1月1日 至 2021年6月30日）に係る損益に対する調整

(単位：千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
売上高	2,879,446	-	37,500	2,916,946	A	売上収益
売上原価	919,658	-	42,810	962,469	F G	売上原価
売上総利益	1,959,787	-	△5,310	1,954,476		売上総利益
販売費及び一般管理費	1,141,354	△748,679	383,538	776,214	C F G	販売費及び一般管理費
	-	748,679	22,227	770,906	C F G	研究開発費
	-	29,054	-	29,054		その他の収益
	-	179	-	179		その他の費用
営業利益	818,433	28,874	△411,076	436,230		営業利益
営業外収益	264,568	△264,568	-	-		
営業外費用	179	△179	-	-		
特別損失	34,825	△34,825	-	-		
	-	235,513	-	235,513		金融収益
	-	34,825	△34,825	-	B	金融費用
	-	-	△359,567	△359,567	D	持分法による投資損失 (△)
税引前四半期純利益	1,047,996	-	△735,818	312,177		税引前四半期利益
法人税、住民税及び 事業税	95,483	181,983	43,046	320,513	B E	法人所得税費用
法人税等調整額	181,983	△181,983	-	-		
四半期純利益	770,529	-	△778,865	△8,335		四半期損失 (△)

前連結会計年度（自 2021年1月1日 至 2021年12月31日）に係る損益に対する調整

(単位：千円)

日本基準表示科目	日本基準	表示組替	認識・測定 の差異	IFRS	注記	IFRS表示科目
売上高	9,365,964	-	56,250	9,422,214	A	売上収益
売上原価	2,358,013	-	35,423	2,393,436	F G	売上原価
売上総利益	7,007,950	-	20,826	7,028,777		売上総利益
販売費及び一般管理費	2,589,807	△1,638,591	403,318	1,354,534	C F G H	販売費及び一般管理費
	-	1,638,591	15,837	1,654,429	C F G	研究開発費
	-	130,624	△84,000	46,624		その他の収益
	-	191	-	191		その他の費用
営業利益	4,418,143	130,433	△482,329	4,066,246		営業利益
営業外収益	356,525	△356,525	-	-		
営業外費用	191	△191	-	-		
特別利益	84,000	△84,000	-	-		
特別損失	34,825	△34,825	-	-		
	-	309,901	-	309,901		金融収益
	-	34,825	△34,825	-	B	金融費用
	-	-	△572,383	△572,383	D	持分法による投資損失 (△)
税引前当期純利益	4,823,652	-	△1,019,887	3,803,764		税引前利益
法人税、住民税及び 事業税	806,187	411,057	13,288	1,230,532	B E	法人所得税費用
法人税等調整額	411,057	△411,057	-	-		
当期純利益	3,606,407	-	△1,033,175	2,573,232		当期利益

## 損益に対する調整に関する注記

### (表示の組替)

日本基準では「販売費及び一般管理費」に含めて表示していた「研究開発費」について、IFRSでは「研究開発費」として独立掲記しております。

日本基準では「営業外収益」、「営業外費用」、「特別利益」及び「特別損失」に表示していた項目について、IFRSでは財務関係損益を「金融収益」及び「金融費用」に、それ以外の項目を「その他の収益」、「その他の費用」に組替えております。

### (認識・測定の差異)

#### A) 収益認識時点の変更に伴う売上収益の調整

日本基準では一時点で収益を認識していた一部の取引について、IFRSでは履行義務の充足に応じて収益認識するように変更したため、「売上収益」を調整しております。

#### B) その他の金融資産に対する調整

日本基準では資本性金融商品の売却損益を純損益として認識しておりましたが、IFRSではその他の包括利益を通じて公正価値で測定すると指定した資本性金融商品については、公正価値の変動額をその他の包括利益として認識し、売却時に直接利益剰余金へ振り替えております。

#### C) 賦課金に関する調整

日本基準では納税通知書等に基づき計上していた固定資産税等の賦課金について、IFRSでは支払義務が発生した時点で支払見込額を認識しております。

#### D) 持分法に関する調整

日本基準では連結財務諸表を開示しておらず、関連会社について持分法を適用しておりませんでした。IFRSでは関連会社について持分法を適用しております。

#### E) 繰延税金資産及び繰延税金負債に対する調整

IFRSの適用に伴い、全ての繰延税金資産の回収可能性を再検討しております。また、日本基準からIFRSへの調整に伴い一時差異が発生したことにより、繰延税金資産及び繰延税金負債の金額を調整しております。

#### F) 未払有給休暇の計上額の調整

日本基準では会計処理が求められていなかった未消化の有給休暇について、IFRSでは未払有給休暇として計上したうえで、費用として認識しております。

#### G) 株式報酬

株式報酬制度（BBT及びJ-ESOP）について、日本基準では要給付見込額を引当金として認識しておりましたが、IFRSでは公正価値に基づいて費用を認識するとともに、持分決済型の株式報酬として同額を資本の増加として認識しております。

有償ストック・オプションについては、日本基準では費用を認識しておりませんでした。IFRSでは権利確定条件の付されたストック・オプションのうち株式市場条件以外の条件が付されたストック・オプションについては、株式市場条件以外の権利確定条件を反映した権利確定すると見込まれる数及び公正価値に基づいて測定した金額を費用処理しております。

#### H) 取得関連費用

企業結合に係る取得関連費用は、日本基準では単体財務諸表において資産として計上しておりましたが、IFRSにおいては、発生時に費用処理しております。



前第2四半期連結累計期間（自 2021年1月1日 至 2021年6月30日）及び前連結会計年度（自 2021年1月1日 至 2021年12月31日）に係るキャッシュ・フローに対する調整

日本基準に基づくキャッシュ・フロー計算書と、IFRSに基づく連結キャッシュ・フロー計算書に重要な差異はありません。